

2022年度 学校評価（自己評価）報告書

	評価単位	評価のまとめ
教育課程	1. 教育目標	<ul style="list-style-type: none"> 教育目標を「子どもへの願い」としたことで、より子どもを中心におき、子どもの主体性を大切にした教育内容を意識するようになった。 保護者との対話を引き続き丁寧に行い、家庭と連携しつつ、自分、周りの人、環境への意識が共通理解できるよう努めた。
	2. 教育課程の編成	<ul style="list-style-type: none"> 「子どもへの願いをもとに、「自分」「ひと」「もの・こと」との関わりを軸においた教育課程を作成したことで、保育内容の工夫や配慮点の整理がしやすくなった。 日々の対話型マップ記録は、限られた時間の中で、教師が連携して保育を省察することを可能にし、それをもとに学期末に「遊びと生活の履歴」を作成することで、長期的な省察や次年度に向けた見通しを持つことができるようになった。 入園前後、入学前後の接続期カリキュラムの作成により、子どもの育ちの連続性を意識した保育につながっている。
	3. 年間保育日数 ・時数	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初の分散登園は、子ども一人一人と丁寧に関わることができ、安心して園生活を始める上で有意義であった。 感染状況により、昼食場所について配慮が必要であったが、子どもの体力や、遊ぶ意欲を考慮し、弁当の回数や日数をコロナ禍以前に戻したことは、子どもたちの園生活の充実につながった。 保育時間については、地域の園とのバランスも考慮したいところだが、時間の長さだけではなく、質についても十分に意識においた検討が必要である。
	4. 教育活動と その成果	<ul style="list-style-type: none"> 「もの」「こと」に着目した事例を教育課程に照らして考察することを試みた結果、3歳児から5歳児が影響し合いながら関わりを広げていく姿や子どもの育ちの適時性・連続性を意識においた教師の関わりのように改めて気づくことができた。 非常勤講師を交えた拡大打合会を定期的実施することで、異学年の様子や保育の見通しを共有することができ、その後の保育の中での異年齢の関わりを支える上での共通理解が図れた。
	5. 行事	<ul style="list-style-type: none"> コロナ以前の生活に戻すべく、運動会や親子遠足などは参加学年や内容などを配慮しつつ実施を試みた。次年度以降も、保育時間とのバランスを考慮しつつ、子どもたちにとって意味のある行事体験の充実を図ってきたい。 収穫体験として実施してきた芋掘りでは、畑で収穫物を味わう体験も、感染防止対策に十分に配慮した上で実施し、五感を通した学びにつながった。一方、新たに4歳児で実施した大根掘りでは、生育状況の関係で予定に急な変更が生じた。行事の実施時期については、他の行事とのバランスを考え、見直しのある無理のない計画を目指していくことが課題である。
	6. 進路指導	<ul style="list-style-type: none"> 年長組担任の負担や重責の軽減を図り、園としての考えを共通理解しながら、年長組の生活や年長児一人ひとりを全職員でフォローする体制作りは引き続きの課題である。 個人面談、説明会等は、感染症対策に努めつつ、滞りなく進めることができた。進路選択の幅を広げ、子どもにとってのより良い進路を考えていく保護者との関係づくりに努めた。 幼小接続や保護者との信頼関係の構築という観点から、幼小連絡進学の実現度では困難さを伴う点が大きく、内規の見直しなど、今後のありようは検討の必要がある。
	7. 研究・研修	<ul style="list-style-type: none"> 開発研究最終年次として、新たに作成した教育課程及び、入園接続期並びに幼小接続期カリキュラムに基づいた保育実践を試み、その発信に努めた。日々の対話型マップ記録や週案及び週ごとのドキュメンテーションの作成、学期ごとの遊びと生活の履歴の整理等、日、週、期ごとの丁寧な省察が翌日、翌週、次年度へとつながっていく評価サイクルの構築、充実を図った。入園・入学前後の接続に着目し、教師の関わりにおける身体性について考察を深めてきたプロセスは、子どもの育ちの連続性を意識においた保育の質の向上につながった。 公益財団法人前川財団の「家庭教育研究及び実践活動助成」を受け、「対話による保育記録の成果と課題」について研究を進めた。研究の一環として、ヨーロッパ幼児教育学会報告にて発表。本園の対話型マップ記録が、子どもと他のヒト・モノ・コトとの関係(Relationship)とその変容を捉えることを可能にする記録であるとして評価をうけた。 感染状況により見合わせていた公開保育研究会を実施した。研究発表はオンデマンド開催とし、対面での公開保育は、参加人数を縮小しての実施となったが、学年協議会では対話を重視した話し合いが可能となり、全体会でのカフェスタイルのグループ討議では、各現場での情報交換もでき有意義であった。 学内の「三園合同研究会(対面)」の継続的な実施、地域や交流のある他園とのつながりを意識においた学年ごとの「保育を語り合う会(オンライン)」の実施は、保育者の悩みや戸惑いを共有し、子ども理解を深める互恵性のある場となった。今後も継続してきたい。
A 学校運営 (教育課程を支える諸条件)	1. 経営・組織	<ul style="list-style-type: none"> 勤務分掌は、少ない職員体制のもとで各人が責任をもって執行しているが、情報、研究など、役割を担う個人の負担が大きい。引き続き、協力体制を整えつつ、実施してきたい。 朝の打合せの時間での申し送りでも共通理解を図り、見直しを持った仕事の進捗に努めた。 勤怠管理システムの導入で、勤務時間担当の負担はいくらか軽減されてきている。
	2. 出納・経理	<ul style="list-style-type: none"> 預かり金の運用については、複数の目で確認することで適正な管理に努めた。学生納付金・運営基金については、光熱費等の高騰に伴い残高の確認を頻繁に行い、全教員と共有しつつ運用に努めた。 保育の充実のためのよりよい活用を目指し、使途について検討を重ねたが、物価上昇や感染症の沈滞に伴う新たな行事の実施などにより、予定より支出が高んだ。次年度はより計画的な運用を目指していく。
	3. 施設・設備	<ul style="list-style-type: none"> 樹木の剪定により、園庭の見通しがよくなり、子どもが好んで遊ぶ空間が広がった。 園庭高台のログハウスや丸太の一本橋を新調し、子どもたちが安全に安心して過ごせる保育環境の整備、改善が出来た。 園舎内の木製家具の修理や塗り直しを引き続き実施。園環境の美化につながり、モノを大切に扱う意識の育ちが見られる。 園児用の折りたたみ机を購入し、昼食時に遊戯室を有効活用することで、クラス全員で昼食を取ることが可能になった。
	4. 健康	<ul style="list-style-type: none"> スクールカウンセラーとの連携は、保護者のみならず、保育者の安心にもつながっている。 巡回指導については、今後、指導員とのコミュニケーションを図り、子どもが多面的な理解に生かせるようにしていきたい。 登園時の健康チェックなど、家庭と園との協力体制のもと、感染拡大防止のための措置は引き続き滞りなく実施できた。 園内感染についての対応も、コロナ対策室との連携体制のもと、最善を尽くすことが出来た。今後も安心できる保育環境の保持、教職員の健康管理について、引き続き真摯な取り組みを目指す。
	5. 安全	<ul style="list-style-type: none"> 感染症対策に伴う環境安全に関しては、大学のコロナ対策室と連携して、状況に合わせて適切に判断し、対応を重ねている。 日常的に気づいたことは声を掛け合い、施設課に対応を依頼するなどして安全確保に努めた。安全点検の定期的な実施を徹底させた。 避難訓練は回数を重ねることで、子どもたちのスムーズな行動や教師の意識向上につながっている。予想外の状況下においても、子どもの安全を最優先に判断し行動できるよう、様々な訓練に対応していきたい。また、訓練後の振り返りの内容を教師間で共有できるとよい。 登降園時の子どもの受け入れや引き渡しについては、より慎重に丁寧に実施することで、保護者の安心につながるよう努めた。
	6. 情報	<ul style="list-style-type: none"> 大学主催の研修を受けることで、情報管理の重要性を確認でき、情報管理に対する意識向上につながっている。 ホームページを随時更新するとともに、必要に応じて見やすく整理することで、情報が正確に発信されるよう努めた。 誕生会後の家庭への歌の配信は、感染症防止対策に伴い、歌を歌うことの制約を少しでも軽減する上で有効であり、保護者からの評価も大きかった。
	7. 開かれた学校	<ul style="list-style-type: none"> 学校関係者評価委員会、学校評議員会は、対面での実施がかない貴重な意見交換の場となり、多面的な意見や指導をいただくことで、園運営や研究内容の質の向上につながった。 同窓会関係の催しについては、感染状況や参加者の意向を踏まえ、内容についてさらに検討を重ねている。 公開保育研究会の3年ぶりの対面開催、及び、文京区の公立幼稚園に呼びかけ開催した保育を語り合う会の実施、育児手帖の地域への配布等により、本園の保育実践や研究内容の積極的な発信に努めた。 PTA委員会活動は、バザーやもちつきなど、引き続き活動は中止とした。次年度へ向けには、保護者と協力しながら実施も視野に入れた検討を行う。
	8. 入園検定	<ul style="list-style-type: none"> 感染防止に伴い、HPでの情報公開にとどめたが、次年度は説明会の対面開催を計画している。 WEBの導入から2年目となり、前年度の反省を踏まえて改善、実施できた。志望者からの問い合わせも減り、スムーズな運用ができた。 判定基準等、内容については、さらに検討を重ねていく。

		<ul style="list-style-type: none"> ・ムードルを廃止し、園から保護者への情報発信のツールを整理したことで、わかりやすくなったという保護者の声が多かった。 ・写真記録のファイルは、子どもの様子や生活の流れを理解するよい機会になったと保護者からの賛同を得た。付箋紙でのやりとりは、参加する保護者にやや偏りがあるため、今後は、多くの人が参加しやすい方法を検討したい。 ・コロナ禍で保護者同士の関わりの場が減っていたこともあり、懇談会におけるテーマを元にしたグループ懇談の時間は好評だった。 ・誕生会後の副園長との懇談(ホットモタイム)は、学年を超えた保護者同士の対話の時間として位置付けてきた。ここの対話の内容がすぐに教師に共有されることで、子どもの家庭での様子や保護者の悩みを知ることができ、保護者との信頼関係につながっている。 ・親子遠足、保護者がボランティアなど、感染状況を見て徐々にコロナ以前に戻し、実施するよう努めた。 	
B	大学との連携	9. 保護者との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度より幼小接続部会を立ち上げた。幼小双方の教育・保育環境を見合い、実践を語り合うことで、子どもの育ちの連続性について改めて丁寧に捉え直すことを重ねている。次年度も継続したい。 ・エシカル部会では、幼稚園から大学までが協働し、エシカルアクションを意識においた交流活動を工夫した。高校生作成のビデオ視聴をし、フードドライブ活動にも参加した。 ・コンビテンシー育成開発研究の一環で、中学生と4・5歳児との交流活動を実施。園児のリクエストに応え、中学生が毛糸を染めてプレゼントしてくれた。中学校の時間割や幼稚園の行事の関係で、細やかなやりとりができないことが残念であったが、次年度も互恵性のある交流を継続したい。 ・学内のナサー、こども園との三園合同研究会では、乳幼児期の子どもへの理解を深める機会となり、日々の保育を多角的視点から振り返る時間になり有意義であった。
		1. 連携研究	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども学フィールドワークでの毎回の観察記録により、子どもたちの遊びの流れや詳細なやりとりを知ることができた。また、振り返りの会では、学生からの率直な感想や意見を聴くことが出来、保育にまだ馴染みのない学生にも伝わるよう保育を改めてみつめ、考える有意義な時間となった。 ・連携研究の一環で小学校の授業を参観したり、中学校の公開授業にコメンテーターとして参加したりする機会を得た。子どもたちの育ちや経験のつながりを意識する貴重な経験になった。
		2. 授業交流	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども学フィールドワークでの毎回の観察記録により、子どもたちの遊びの流れや詳細なやりとりを知ることができた。また、振り返りの会では、学生からの率直な感想や意見を聴くことが出来、保育にまだ馴染みのない学生にも伝わるよう保育を改めてみつめ、考える有意義な時間となった。 ・連携研究の一環で小学校の授業を参観したり、中学校の公開授業にコメンテーターとして参加したりする機会を得た。子どもたちの育ちや経験のつながりを意識する貴重な経験になった。
		3. 教育実習	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えるだけではなく、一緒に行うことで作業の意味や流れを指導していく必要性を感じている。 ・日々の保育後の省察を丁寧に行うよう心がけ、保育後は、見通しを持って翌日の保育準備ができるよう指導した。 ・実習日誌や指導案の書き方(パソコン使用)については、学生の負担の軽減のみならず教師としての必要なスキルも考慮して検討する必要がある。
		4. 専門委員会	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年に引き続き、職員会議で、各専門委員会での議事録を共有し、検討内容等、共通理解を図った。 ・他附属校との情報交換を丁寧に行い、園内で共有してから検討していくことで、スムーズな連携が行われるよう努めた。
		5. 大学の講義担当	<ul style="list-style-type: none"> ・保育内容指導法「人間関係」は、対面での授業を行うことができ、学生同士が対話を通して学びを深めていく経験ができた。 ・家庭看護学は、4附属で連携しつつ、授業内容の充実を図った。
		6. インターシッパ	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は2名の希望者があった。うち1名は半期(10月～12月)の受け入れであったが、入園検定期間とも重なり十分に回数を重ねられなかった。通年の受け入れが望ましい。また、学生同士の協力的な活動になっていくよう日程の調整も検討の余地がある。
社会貢献		1. 参観・研修受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・感染状況の沈静化に伴い、対策を充分とった上で、国内外の参観者の受け入れを実施した。参観前の説明に加え、保育後に対話の時間をとることで、保育の省察が深まり、互恵性のある学びにつながった。
		2. 公開研究会開催	<ul style="list-style-type: none"> ・申込みやアンケートはWEBで対応。研究発表はオンデマンド配信としたが、公開保育は3年ぶりの対面(人数を絞っての)開催とした。
		3. 現職研修	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は該当項目なし
		4. 途上国支援	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は該当項目なし
		5. 出版活動	<ul style="list-style-type: none"> ・「保育手帖その1・その2」は、在園の保護者に配布。新入園の保護者には入園前に配布することができた。「保育手帖その3」の作成も在園・卒園の両保護者の協力を得ながら進めることができ、3月に発行予定である。保護者の悩みや戸惑いに共感しつつ、園生活への見通しがもてる内容だと好評を得ている。 ・文部科学省開発研究最終年次の報告書を刊行した。教育目標に基づいた教育課程他、入園接続期並びに幼小接続期カリキュラムを作成。保育の実際に即しているかを事例の省察を重ねつつ検討し、整理しまとめた。
		6. 各種研究会への協力・支援	<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインによる研究会への各教師の主体的な参加に加え、創立記念のための休園日を活用し、他の乳幼児施設などを視察した。各自の学びを共有する機会がなかなか持てないことは引き続きの課題である。 ・保育者養成校や他大学の外部講師他、各種研究会でのコメンテーター、座談会への参加、事例提供等に協力した。
		7. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・倉橋協会の呼びかけで、座談会(保育通信)に参加、協力した。 ・朝日新聞別刷り版に子ども学フィールドの保育観察風景の写真を提供、及び文藝春秋の取材協力に応じた。 ・創立150周年に向けて、歴史資料から学ぶ機会を設けていきたい。

2022年度 学校評価(自己評価)まとめ (・成果と*課題)

<教育課程>

・教育課程を教育目標(子どもへの願い)に即した形に編成し直したことで、保育の見通しを持ちやすくなり、子ども理解や保育内容の充実につながるものになった。

*園内のこども園、いずみナサーリーとの三園合同研究会は、子どもの育ちの連続性を意識におき子ども理解を深める対話の場となっている。

*園の教育理念を保護者に分かりやすく伝えるよう工夫し、子どもを中心に園と家庭とが横並びで子どもの育ちを支える対話的な関係づくりに引き続き配慮する。

<園運営>

・園庭遊具の新調、樹木の剪定、園舎内の木製備品等の修理・改善など、運営基金を有効に活用することで園環境の整備を図った。

・新型コロナウイルス感染症対策に伴い、安心安全な園生活が送れるよう、引き続き十分に配慮してきた。同時に大学のコロナ対策室と相談しつつ、少しずつコロナ以前の暮らしに戻していくよう努めた。

*教師一人一人の負担感が軽減されるよう、行事の持ち方や研究の進め方などは、見通しを持って計画的に行う。

<大学との連携>

*大学の講義や、観察実習の場として、積極的に協力し、学生の実践的な教育に役立てるよう貢献した。

*大学と連携し、学生の学びやすさに配慮しながら、現場として必要なこと、大切なことを指導できるよう取り組んでいく。

<社会貢献>

*各地域の研究会、養成校や他大学の講義に外部講師として積極的に協力したり、公開保育研究会の対面開催を実現し、本園の教育理念や研究について積極的な発信に努めた。

・本園の歴史や教育に関する資料提供等の依頼があり協力した。

*さまざまな園や施設との交流をはかり、互恵性のある学び合いを推進していく。

*保育に支障のない範囲内で、国内外の参観者を受け入れることで、日本の保育の特徴を発信し続けるのと同時に、子どもたちにとっても異文化に触れ、学ぶ機会となるよう努める。